

障害児保育に関する試み

運動を中心としたグループ活動とマイクロコンピュータを用いた感覚統合保育

増田 まゆみ

(小田原養児園)

1. 目的

障害児の成長・発達にとって、ほぼ同年令の子どもと共に生活することは、必要かつ有用な経験である。しかし、単に、健常児と生活空間を同じにすることで、又、自覚性を待っていたのでは、その成長・発達を確実なものにすることはできない。

障害児が、意欲をもち、いきいきと生活できるようにするためには、心をゆり動かすような、適切で、多様な環境の設定が必要である。すなわち、子どもの発達段階をみきわめ、ニーズに応じた計画的、継続的な保育の中から、彼らの潜在能力を高め、全面発達を図ることが必要である。乳幼児期は、運動的活動が、身体ばかりか、精神への発達にも大きく影響する。このことは、感覚・運動段階の発達に位置する障害児においても、異なるところがなく、むしろより必要である。スキヤモンの発達曲線からも、幼児期は、感覚・神経機能を中心とした運動をより多くとり入れることが望ましい。

そこで、本園では、「子どもの内にある要求を大切に」を基本に、乳幼児期の発達特性に適した活動を選択し、「分離しつつ統合保育」を進めてきている。本園の統合保育の諸形態の中からの運動を中心としたグループ活動——仲よしたいそうと②マイクロコンピュータを用いた感覚統合保育について考察する。

2. 方法

運動を中心としたグループ活動——仲よしたいそうは、障害児10名(ダウン症2, 精神発達遅滞5, プラウウィー症候群1, 自閉的傾向1, 小脳変性症1), 健常児10名(リーダーシップのとれる子, 消極的で自信のない子等さまざまなタイプ), 保育者5名をメンバーとして、小田原養児園ホールで行われた。期間は、4月から7月までは9時40分から30分間、8月以降3月までは、10時より35分間、毎日行われた。

3. 経過 (表1)

4. 結果及び考察

①リトミック的活動の活用

歩く、走る、跳ぶ等の運動は、すべての行動の基礎であり、これらがどの程度習得されているのか、子どもの生活全般の制約範囲となる。適切な音楽刺激を与えることで、耳と体の動きとの協応反応がスムーズに

表1 仲よしたいそう (昭和57年度 4月～3月)

期	活動	内容
第一期前半 (4月～5月)	①	楽しい園生活の一観見場面として位置づける。
	②	1日の園生活がスムーズに送れるよう、登園後の一番好きな時間に体を十分動かすことにより心身のリズムを整える。
第一期後半 (6月～8月)	③	ともちや・保育者と共に、歩く、走る、跳ぶ等の基本的運動や、いろいろな活動を毎月1回経験することにより、体力の増強・運動能力の助長・言語・社会性の発達、また、さまざまなことわりの軽減等を図る。
	④	ひとりひとりの状態を適切に把握し、能力に応じたカリキュラムを立て、よりよい成長・発達を促す。
第二期 (9月～12月)	⑤	仲よしたいそうの場を、健常児が障害児にどのように関わり、変化していくかをみる。
	⑥	仲よしたいそうの場を、健常児が障害児にどのように関わり、変化していくかをみる。
第三期 (1月～3月)	⑦	仲よしたいそうの場を、健常児が障害児にどのように関わり、変化していくかをみる。
	⑧	仲よしたいそうの場を、健常児が障害児にどのように関わり、変化していくかをみる。

なり、子どもたちは、喜々として、喚声をあげながら基本的な行動パターンを会得していく。諸感覚機能が未分化な状態にある障害児に、子どもの心と心地よくゆさぶる音楽刺激が、粗大運動、微細運動をよりスムーズに行うことを可能にし、偶発性の中で、身体的に反応することが感覚機能を高めるために効果があることが4年間の活動を経過して明らかとなっている。集団の相互作用を活用して、子どもに潜在する能力を引き出していくには、リトミック的活動は有用である。

◎子どもの自発性の尊重

感覚教具、巧技台等を使って、3つの運動の場を設定し、子どもの意志で運動を選ばせ、又、運動の方法についても、保育者の指示はできるだけ与えないようにした。子どもは、その発達段階に応じて工夫し、どのようにして、よりモデル的操作に近づくか考えをめぐらさず。自発性を尊重し、選択し決定する自由を与え、子どもなりの工夫をさせることで思考の発達を促進する一助となりうる。適切な場の設定、声かけがある、グループ内の子とも相互の力で、活動を目的に向けて押し進めるエネルギーを作っていく。

◎運動性の発達と言語・社会性の発達との関連

運動と運動の間に手遊びや教具、具体物を媒介とした言語遊びや微細運動を中心とした時間がある。充分体を動かした後、心も体もリラックスした状態のため、声も大きく、言語や微細運動の発達助長、形・色・数・身体イメージ、位置関係等の認知機能を高める。

言語発達と運動性の発達、社会性の発達との間に、干渉と促進の関係があることは、仲よしたいそうはじめ日々の保育の中で明らかである。例えばアラタカイリー症候群のSちゃん。歩く、走るといった基本的動きが確立し、両足ジャンプ等に成果が表われ始めた時期から、表出言語が急激に増え、会話が成立するようになる。それと共に、自己中心的な行動が減少し、情緒も安定してくる。しかし、色や形の弁別、数については、何となくわかっていない状態から脱しきれない。

運動性や、日常的な会話や社会性がかなり発達しても、知的発達(認知・弁別)や言語の発達は相対的に落ちるケースがほとんどである。

そこで、仲よしたいそうをベースにした保育効果をより拡大するために、マイクロコンピュータの画面表示を用いた感覚統合保育の試みがスタートした。

◎抽象概念に関する刺激に対して反応しにくい子どもに、どのように刺激を与えるかが、大きな課題である。子ども用に作られたスイッチボックスのボタンスイッチを自分の手指を使ってタッチし、画面をみるとい

う、目と手の協応作用を基盤にいくつかのプログラムを開発してきた。保育を進める上で重要なのは、子どもが楽しく活動できることであり、個々のレディネスに即応したプログラムの作製、与え方への十分な配慮である。数でいえば、そこから3への理解、パターンを認知されたものを一般化していくなど、大きな壁が多々存在するが、適切な場を与えることで、次のステップへ移行する準備をしている。日々の多様な生活経験とコンピュータによる個別指導の相互作用によって、知的発達、言語発達がみられ、そのことが、コミュニケーションを深め、生活経験をより豊かにすることを可能にしている。

表2 マイクロコンピュータを用いた感覚統合保育

ね ら い	① 保育者と子どもが個別적인関わりをもつ中で、情緒が安定し、楽しい時間となるようにする。
	② 目と手の協応性を高め、異なった感覚器官の入力を統合する能力を高める。 自分の手指を用いて、スイッチボタンを押すことで、画面が変化することに興味をもち、集中力、持続力を培う。
	③ 適切なプログラムを与えることで、色、形の弁別、数、物の大小、高低、位置関係等に興味をもたせ、認知、弁別能力を高める。又、副教材を用いることで、活動の幅を広げ、理解を深める。
	④ 子どもの言語による表現をできるだけ引き出し、言語の発達を促す。
	⑤ コンピュータによる保育が、仲よしたいそうはじめ、園生活、又、家庭生活と関連をもって押し進め、子どもの全面発達を促す。
さ ば い	タケムチ症3名、アタタカイ症候群1名、狭頭症1名 小脳変性症・視覚性変性1名、発達遅滞4名
方 法	子どもの状態に合せ、副教材等を用いながら、週に2回 ずつ、1回の所要時間は1人20分程度、ポレイルで 1人の子どもに保育者2人が担当する。

表3 プログラム (昭和58年6月～59年1月)

水田あはれ	色・赤・黄・青 形・○△□☆	色・赤・黄・青・紫・白 形・○△□☆	大中小
いっかひい	数・1～3 形・自動車、4輪、2輪、ヘリコプター、船等	数・1～5 形・○△□☆	
とちかたかい	色・3色 形・□△	音・高低(図・音の対応)	
UFO	名・位置関係(上・下・左・右・中)		
モサイク	色・5色 数	位置関係(対称)	
カタハメ1～3	色・5色 形・15種	位置関係(形状対応)	
オカイ(音階)	色・7色 音・C D E F G A B C・長短	位置関係(高低・順逆)	

障害児の全面発達の助長、幸福感の達成のために、仲よしたいそうやコンピュータによる感覚統合保育を含め、さまざまな活動が、有機的つながりをもって展開し、子どもの発達段階に適した、より有用な保育となるよう、さらにとりくんでいきたい。

謝辞 本研究に当って、コンピュータのシステム開発に協力いただいた、東海大学工学部電気工学科と、貴重な助言をいただいた筑波大学次郎丸勝子教授に厚くお礼申し上げる次第である。